

ボストン・ミュージカル・インテリゲンサー

批評：

2012年4月13日

桜寄贈百周年記念雅楽演奏会

アンソニー・パーマー筆

100年前に当時の東京市長尾崎行雄が日米友好を願って桜の木をワシントンDCに寄贈した。今回の百周年を祝した桜祭りはボストンと日本（ボストンは京都市と姉妹関係にあり、マサチューセッツ州は日本の最北端島である北海道と姉妹州の関係にある）の両者間の伝統をさらに深め、両者の絆が強まり、友好が確固たるものになっていることを示している。

その一環として4月9日ボストンにあるシンフォニーホールにおいて世界で最も古いオーケストラであり、日本の宮中や神社で演奏される珍しい音楽である雅楽の公演が開催された。

ボストン・シンフォニー・オーケストラのメンバーが西洋の古典音楽を演奏し、北之台雅楽アンサンブルが日本の古典音楽で聴衆を魅了した。北之台雅楽アンサンブルの設立は1982年で、東京から西へ2時間ほどのところに位置し、現在、宮内庁の楽師である安齋省吾氏から指導を受けている。北之台の目的は、日本の古典芸術である「雅楽」による青少年の情操教育、また日本文化紹介として国内外に於いて公演を行い文化交流の一助に資することである。

「雅楽」とは優雅、正当、或いは洗練された音楽と言う意味である。舞が伴うと舞楽と呼ばれる。雅楽はインド、中国、韓国などのアジア大陸に由来する。日本へは早いもので3-5世紀頃、より確証的には6-8世紀頃に韓国（高麗楽）から伝わってきた。しかし、中国やインド（唐楽）からは6世紀に伝来している。

北之台は当初は宮内庁の故東儀文隆氏から指導を受けていた。音楽の代名詞であるドイツのバッハ家のように東儀家は聖徳太子（574-622）の頃より続く楽師の家であり、雅楽の伝統を継承してきている。雅楽は強く宮中と結びついているが、日本人の自然信仰である神道の神社などで儀式音楽としても用いられている。1868年の天皇親政体制と共に、神道の神社と仏教のお寺が分離され、雅楽は宮中以外では神社での活動のみと制定された。

第一部ではBSOのメンバーがチャイコフスキーのアンダンテ・カンタービレを15人の弦楽器奏者で演奏し、続いてバッハのブランデンブルグ・第3協奏曲をハーブシコードの伴奏で紹介した。チャイコフスキーの曲は静かで安定、且つ驚くほどの統制された正確さ

で演奏されたが、バッハの曲は華麗で、活力があり、しっかりとした演奏であった。これらの素晴らしい演奏が次に何が起こるのかを予知していた。

その夜の素晴らしい第2部は舞楽「甘州」で始まった。「甘州」は中国を起源とし、唐の玄宗帝（8世紀）によって作られた。この曲を奏すると蛇や毒虫が人を襲わないという言い伝えがある。4人の舞人はで色鮮やかな襲装束を着て無比の優雅さを舞いで披露した。最後は甘州地方に伝わる古い文化である種子播手と言う独特の舞手で終わった。舞人がよく見えるようにと舞台の両脇に置かれた楽器は舞に必要不可欠なものであるが、と同時に独自の存在感を示していた。

アンサンブルの構成に馴染みのない観衆は簡単な楽器の紹介を受けた。（以下楽器の紹介は省略）

舞台中央に設けられた30cm程の高さの平台にはその前方に日本の絵画で良く見られる赤い手すりが設置され、全体に楽器が並べられた。正面には打楽器が置かれ、次列に弦楽器、管楽器が後列に置かれている。最初に雅楽の六調子の一つの「音取」が演奏され、次に唐楽（唐の音楽）に属する管絃「胡飲酒破」が演奏された。「胡飲酒破」は「双調」で洋楽のG音に相当する音を基音としている。

北之台は優れた雅楽団体である。彼らの音調は選曲と完璧にあっていた。A音は大体435cps（ヘルツ）で西洋音楽の普通値である440cpsを下回っていた。楽句の区切り方も完璧で、雅楽の音階構造の形態をよく示していた。日本ではこの30年間に雅楽団体がかなり増えたが、私が今まで日本で聞いた中でも彼らの音色は非常に高いレベルであった。

さて、舞楽に戻って、次は「迦陵頻」であった。この舞は736年にベトナムを旅していた僧仏哲によって日本へもたらされた。「迦陵頻」はインドの神話に登場する霊鳥であり、極楽浄土で法を説く鳥とされ、美声ゆえに仏の声とも言われている。舞人は美しい装束を纏い、背には羽根を着け、銅拍子を持ち、その打ち鳴らす音は、迦陵頻の声を表している。子供が舞う童舞（どうぶ）である。春咲く木々草花に鳥が渡り受粉を促し、結実へと誘う。

最後の舞である「浦安の舞」は近年の作である。この舞は紀元2600年に日本の建国を祝い昭和天皇（1901-1989）の歌「天地の 神にぞ祈る朝なぎの 海のごとくに 波たたぬ世を」に基づき1940年に作られた。「浦安」とは「心の安らか」という意味である。平和を祈り作られた舞である。時の宮内庁楽部楽長、多忠朝（おおのただとも）氏が作曲し、振り付けたものである。舞姫が身に着けているのは、十二単衣を基調とした舞楽装束である。朱色の上衣に紫紺の絹ばかまを着け、七尺、約二メートルの真っ白な正絹の裳を引いている。舞は『扇の舞』と『鈴の舞』からなっていた。

歌舞伎や能のように雅楽に女性が加わるのは最近のことである。多分20世紀後半半ばのある時期からであろう。(1980年代に国内でも有名な女性の笙奏者に出会った)舞人は雅楽では時々女性が舞うが、主に神道の儀式である伝統的な民族舞踊である「神楽舞」に限られていた。今回の公演では全員が女性であった。しかし、楽人は伝統に則り全て男性であった。性別を分けることは日本歴史の初期に始まり、僅かだが様々な方法で文化芸術の中に取り込まれていった。半分が白で半分が黒であり、それぞれの中にも相反する色のサークルが小さく描かれているタオのシンボルのサークルは、文学や文化と同じく中国の影響を受けている。「陰と陽」もこのシンボルを反映している。例えば、雅楽では釣り太鼓(ツン・ドウ)に打ち出す2打は最初の1打は軽く打ち、それは女性を表し、次の一打は強く打ち、それは男性の性格を表現している。また、日本の音楽に取り入れられた中国から来た音階は呂(男性)と律(女性)からなっている。

今回の演奏を表現するに最も相応しい言葉は優雅さと気品である。舞人の動きは高度に制御されていると共に伸び伸びともしていた。リズムは安定した、3部構成の序・破・急であった。その違いは非常に僅かであったがしっかりと確認できた。北之台は素晴らしい雅楽団体であり、彼らの目的は少なくとも米国において観衆の反応からして達成できたのではないか。

著者のアンソニー・パーマー氏の雅楽に対する知識は数年にわたる研究と音楽に携わった経験に基づいている。そして日本では宮内庁の東儀兼彦氏から一年間指導を受けた。